

タイトル	フリードリヒ・シラー『ドン・カルロス スペインの皇太子 演劇的詩』 一八〇五年最終版 第四幕
著者	北原, 寛子; KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(179): (15)-(56)
発行日	2019-07-25

フリードリヒ・シラー

『ドン・カルロス スペインの皇太子 演劇的詩』

一八〇五年最終版 第四幕

北 原 寛 子 訳

第一場

王妃の大広間

王妃。オリヴァレス公爵夫人。エボリ公女。フエンテス伯爵夫人とその他の侍女たち。

王妃 「立ち上がりながら、侍女長官に向かって、」

では鍵は見つけられなかったのね? —— それならば貴重品入れを壊してもらわなくてはなりませんね、しかもすぐに——

「そこでエボリ公女に気づく。彼女は王妃に近づき、手に口づけを

する。」

よく来たわね、公女さん。

また元気になってくれて、嬉しいわ——

たしかにまだ、真っ青だけど——

フエンテス 「いくらか陰険に、」 質の悪い熱のせいですよ、驚くほど神経に障りますの。

そうでしょ、公女さん?

王妃 ずっとあなたのお部屋を訪ねたいと思っていたのよ。—— でも

私には禁止されているの。

オリヴァレス エボリ公女さんは

少なくとも人恋しさで苦しんだりはしていませんよ——

王妃 そう思いたいものだわ。どうしたの? 震えているわ。

エボリ 何でもありません—— 大丈夫です、王妃様。どうか

退出させてください――

王妃

あなたは

私たちに隠しているけれど、あなたが思っているよりも
ずっと体調が悪いのではないかしら？ 立っているのも
辛そうですね。伯爵夫人、

こちらの台に座らせてあげて。

エボリ 外に出た方がいいです。

「退出する。」

王妃

あの人の

後を追って、伯爵夫人――なんてふらふらしているの！

「小姓が一人入って来て、公爵夫人と話をする。彼女はそれから、

王妃に向き直る。」

オリヴァレス

ポーザ侯爵^{マルキ}です、

陛下――王様からの

お遣いだそうです。

王妃

ください。

通して

「小姓が退出し、侯爵^{マルキ}のために扉を開く。」

第二場

マルキ・フォン・ポーザ^{マルキ・フォン・ポーザ}侯爵。先ほどと同じ人々。マルキは王妃の前で片膝をつき、

王妃は立ち上がるように合図する。

王妃

我がご主人様のご命令はなんですか？

それをはっきりと尋ねても――

マルキ

私への言いつけは、

王妃様ただお一人にということです。

「侍女たちは、王妃の合図でその場を離れる。」

第三場

王妃。マルキ・フォン・ポーザ。

王妃 「とても訝^{いふか}しがりながら、」

どういうことですか？ 私は自分の目を信じていいのかしら、マ

ルキ？

あなたが私に、王様から遣わされてきたの？

マルキ

陛下には

そのように特別なことに思われますか？

私はまったくそう思いません。

王妃

そうならば、世界が

軌道から離れてしまったのよ。あなたとあの方は――

正直に言いましょう。

マルキ おかしな話だと？

そうかもしれませんね。——最近は、

まだもつと不思議なことが、いろいろありますね。

王妃 これほど大きなことは、ほとんどありません。

マルキ そうだとしたら、

私がついに転向したのかもしれないと——フィリップ様の宮廷で変わり者を演じることに疲れ果ててしまったりして？
変わり者を！ これはどういう意味だというのでしょうか？

人間たちに対して役立ちたい者は、まず

彼らと等しい立場にいるよう努めなくてはならないのです。

見栄っ張りの衣装を着けて群れても、何のためでしょうか？

そうだとしたら、誰が虚栄心からそんなにも自由だというのでしょうか、

自分の信念を、喜んで宣伝するためでもないというのに？

そうだとしたら、私は自分の信念を

王座に押し付けるべく、働きかけて回ったりするのでしょうか？

王妃 いいえ！——いいえ、マルキ、

たとえ冗談でも、あなたを

こんな中途半端な想像に引っ張り込みたくはないです。あなたは

終わりまでできないものを、

やろうとするような夢想者ではありません。

マルキ そのことを

ちょうどお尋ねしようかと思っております。

王妃 あなたがせいぜい

してもいいかと思うことは、マルキよ——あなたが

私に怪訝に思わせてもいいことは、あるとしたら——それは——

マルキ 二枚舌でしょう。そうかもしれません。

王妃 不真面目ね、

少なくとも。あなたがこれから言うことは、

ひょっとして、王様が私宛にあなたに伝えさせたこと

ではないわね。

マルキ その通りです。

王妃 では、

よい事柄が、悪い手段を高尚にできるのかしら？

——こんなことを疑ってごめんなさい！

この任務に、あなたの高貴な誇りが貸し出されているなんてね？

ほとんど信じられないわ。——

マルキ 私にも信じられません、もしここで

王様を欺くことになったとしたら。

しかし、これは私の意見ではありません。あの方には、

私にお命じになった以上に、

この度は正直にお仕えるつもりでいます。

王妃 そのよう

ですね、もう十分です！ あの方は何をなさっているの？

マルキ 王様ですか？——まるで、私がじきに、

手厳しい判断を下す女性に、復讐されるかのようなですね。

私が急いでお伝えしようとしていないことですが、

陛下はお急ぎとお見受けしました、

ほんのわずかしき聞いておりません——しかし

お聞きただかねばなりません！ 国王陛下は、

王妃陛下に、今日はフランス大使に

謁見を許さないようお求めになっています。これが

私の任務です。完了いたしました。

王妃

それですか、

マルキ、あなたが私に、あの方から

伝えるよう預かってきたのは？

マルキ

ほぼこれだけのために、

私はこちらへ参りました。

王妃

私は、

侯爵、おそらく秘密のままであるべきことを

知ろうなどと欲を出さないようにしたいと思います——

マルキ

そうでなくてはなりません、王妃様——たしかに

あなたがご本人でなくても、ある種の人たちをご警戒くださいと

急いでお伝えさせていただきたいものです——しかし

こんなものはあなたにはご不要です。危険は

あなたの周りをうごめいているかもしれません、

それは決して見聞きできないのです。これらすべては

黄金の睡眠を

天使の顔^{かんはせ}から奪い去ってしまう価値はありません。

私^{わたし}がここに来た理由は、実際これだけではないのです。

カルロス皇子様が——

王妃 どうしてあなたは、あの方のところを離れてきたのですか？

マルキ

それは、

真実を崇拝することを犯罪にしてしまうような、

その時代の唯一の賢者の元を去るようなものです——

まさにそれだからこそ、彼の愛のために大胆になれたのです、

賢者が、自分の真実のために死ぬのと同じようなものです。

私はここに、わずかな言葉を持つてまいりました——しかし

ここに、彼自身がいますのです。

「彼は王妃に手紙を一通渡す。」

王妃 「その手紙を読んだ後に、」

あの方は私と話さなくてはならないと言っています。

マルキ

私もそう思います。

王妃

あの方は、私も幸せではないということをして

直接自分の目で見て、

幸せになれるのかしら？

マルキ

なれないでしょう——しかしそれはあの方を

より行動的で、決然とさせることでしよう。

王妃

どういうこと？

マルキ アルバ公爵がフランドルに任命されました。

王妃 任命された——そのように聞いています。

マルキ

撤回することは

王様はおできになりません。私たちは王様を存じ上げています。

しかしまた真実なのは、皇子様が

ここにはいけないということです——

ここはだめです、今はまったく駄目です——そしてフランドルは

犠牲にされてはならないのです。

王妃

それを阻止する方法を

知っていますか？

マルキ

はい——多分。手段は

危険と同様に悪いものです。それは

疑念のように無鉄砲です。——しかし

これ以外の方法を知りません。

王妃

それを私に教えてください。

マルキ

あなたには、

ただあなたにだけは、あえて申し上げます。あなたからしか

カルロス様は嫌がらずに聞きはしないでしょう。

それが呼ばれることになる名前は、たしかに

いくらか粗野ではあります——

王妃

反乱——

マルキ

あの方は

王様に不服従にならねばなりません、

ブリュッセルへ秘かに向かわねばならないのです、

そこでは、腕を広げて、フランドルの人たちはあの方を

お迎えすることでしょう。すべてのオランダ人は

あの方の掛け声で立ち上がるのです。よい事柄が

王の息子によって強められるのです。あの方は

スペインの王位を武器によって震えさせるのです。

マドリードでお父上があの方に拒んでいることを、

あの方はブリュッセルで手に入れることでしょう。

王妃

あなたは

今日彼と話しをして、そのことを主張したのですか？

マルキ

今日彼と

話しをしましたので。

王妃「しばらくの間の後」

あなたが言った計画には、

ぞつとします、そして——同時に魅了されます。私は

あなたが間違っているとは思いません。——考えは

大胆で、まさにそのために、

気に入ったのだと思います。これをじっくり練りましょう。

皇子様はこれを知っていますか？

マルキ

あの方は、

あなたのお口から最初に耳にするべきかと。

王妃 まったくその通りだわ！ この考えは立派だわ。——もし

他のことが、皇子の若さを——

マルキ

無駄になることはありません。あの方は

あちらで、エグモントやオラニエンのような人物を見つけるので

す。

¹ エグモント伯爵は、外交や軍事で様々な功績を残したが、アルバ公爵による新教徒の抑圧政策の際に捕らえられ、一五六八年に処刑された。オラニエン公爵もオランダの大貴族で、スペインへの抵抗運動で中心となった人物であった。アルバ公爵の弾圧によって一時期ドイツに亡命するなどしたが、反乱側の指導者として手腕を発揮し、一五八一年のオランダ独立に大きく寄与した。

皇帝カールの勇敢な戦士たちです。

戦場で勇敢であるように、政治では賢明なのです。

王妃 「勢い込んで、」

違うわ！ 考えは偉大で素晴らしいのだから——皇子様は行動しなくてはなりません。私はそれをいきいきと感じます。

ここマドリッドで、みんなが目にする彼が演じている役割は、

私が彼の立場なら、打ちひしがれます——フランスを

味方にお約束しましょう。サヴォア侯国もです。私は

あなたの意見にすっかり賛成です、マルキ、

あなたの方は行動しなくてはなりません。

しかしこの攻撃には、お金がかかります。

マルキ

それもすでに

準備してあります——

王妃 そのための助言ならできます。

マルキ

それでは、

あなたの方に、お会いできる希望を与えてもよいのですね。

王妃 しっかり考えてみます。

マルキ

カルロス様は

答えを聞きたがっています、陛下。——私はあなたの方に、

空手では帰らないと約束しました。

「自分の帳面を王妃に手渡しながら。」

今は二行で十分です——

王妃 「書きつけた後で、」

私は

あなたの方に再び会うのでしょうか？

マルキ

ご命なら何度でも。

王妃 何度でも——何度でも私が言えば？——マルキ！

どうしてそんなに自由なのですか？

マルキ あなたがいつでもおできになることを、そんなに

訝しがらないでください。私たちは

この自由を享受しましょう、それで十分です——それで

王妃様には十分なのです。

王妃 「遮るように、」

喜ばない

はずがありません、もし自由が最終的に、

ヨーロッパでこの避難所のために残るのなら！

もしそれがあなたの方によって残るのなら！——私の

静かな分け前を計算しておいてください——

マルキ 「激しく、」

ああ、それは存じておりました、

私の言ったことは、ここで理解されるはずだと——

オリヴァレス公爵夫人 「扉のところに姿を見せる。」

王妃 「マルキによそよそしく、」

我が主君たる王様より

伝えらえたことは、

法として尊重いたします。行つて

私が従うとお伝えください！

「マルキに合図を出す。マルキは退場する。」

第四場

回廊

ドン・カルロスとレルマ伯爵。

カルロス ここでは邪魔されることがない。何を僕に打ち明けたいのだ？

レルマ 殿下には

宮廷で、お友達がお一人いましたね。

カルロス 「勢い込んで」 その人のことを僕が知らないかって！——どうして？ 何を言わんとしているの？

レルマ では、私は聞いて許される以上のことを耳にしたと、お許しを乞わなければなりません。しかし殿下、ご安心なさってください、

このことは、少なくとも忠実な者から得ました、要するに、私自身が情報源です。

カルロス 誰のことを

話しているのだ？

レルマ マルキ・ポーザです——

カルロス それで？

レルマ 誰かが知って許される以上のことが、

陛下のことで、彼が分かっていたりなど

したらと思ひまして——

カルロス 何を危惧しているのだ？

レルマ ——彼は王様のところにいました。

カルロス それで？

レルマ 二時間たつぷり、

とても内密にお話でした。

カルロス そうなのか？

レルマ どうでもいいことが話題になっていたのではありません。

カルロス そうだと思ふよ。

レルマ あなたのお名前を、皇子様、

私は何度も聞きました。

カルロス 悪い兆候ではないと

いいけどね。

レルマ それに今朝、

陛下の寝室で、

王妃様のことが、とても謎めいて言及されました。

カルロス 「驚いて引き下がり、」

レルマ伯爵？

レルマ あの侯爵^{マルキ}が退出する時、

これからは彼を案内なしで通すようにとの命令を受けました。

カルロス それは

本当にたくさんのことだ。

レルマ まったく先例のないことです、皇子様、

私が王様にお仕えしてから、思い出す限り。

カルロス たくさんだ！ 実にたくさんだ！——それにどうして、

王妃様のことが話題になったのか、教えてくれないか？

レルマ 「引き下がり」 いいえ、皇子様、

それは私の義務に反します。

カルロス とても奇妙だね！

あなたは僕に、こっちは言うのに、

もう一つのこととは隠すのだね。

レルマ 最初のことはあなた様に、

後のことは王様に対して責任があるからです。

カルロス ——その通りだ。

レルマ マルキをたしかに、

名誉の男として知っています。

カルロス ということは、

あなたは彼をよく知っているわけだ。

レルマ あらゆる徳は、

染み一つありません——試練の

瞬間までは。

カルロス ここでうまくいっているのだ、その後もそうさ。

レルマ 偉大なる王様のご寵愛というものは、

私には、問うに値するものだと思います。この黄金の釣り針で

たくさんさんの強い徳が血を流しました。

カルロス ああ、そうだ。

レルマ 秘匿されたままではいられないものを

見つけ出すことが、賢明であることさえあります。

カルロス そうだね！ 賢明だ！

でも、言っていました、あなたは侯爵^{マルキ}を

名誉の人として認知していたのですよね？

レルマ もし彼が

まだ、そうだとしたら、私の疑いで彼が悪くなることはありませんね。

そして皇子様は、二重に得るものがあるわけです。

「彼は行こうとする。」

カルロス 「感動して彼の後を追ひ、握手して、」

三重に

得るものがあるよ、高貴で品位のあるあなた——僕は

一人の友達のおかげで、自分がより豊かになっているのがわかる

し、

僕がもう持っていた友人は、かけがえないんだ。

「レルマが退場する。」

第五場

マルキ・ポーザが回廊を通ってやって来る。カルロス。

マルキ

カール！ カール！

カルロス 呼んでいるのは誰だ？ ああ！ 君か！

ちようどよかった。先に急いで修道院に行くよ。すぐに追いかけて。

マルキ

たった二分で

いいんだ——ここにいて。

カルロス

もし誰かが不意に来たら——

マルキ 来はしないさ。すぐに済むから。

王妃様が——

カルロス

君は父上のところにいたのだった？

マルキ 呼ばれたんだ、そうだよ。

カルロス 「期待に満ちて」

それで？

マルキ

上手くいったよ。

君は彼女と、お話しすることになるだろうよ。

カルロス

それで王様は？ 何を

王様は一体お望みなのか？

マルキ

王様？ 多くはないよ。——好奇心だよ、

僕がどんな人間か知ろうって。——まだ任命していない友人たちの勤務への心構えだよ。何を聞いたかって？

あの方は僕に、任務を与えようとした。

カルロス

それを君は

拒否したんだろ。

マルキ

当然さ。

カルロス

君たちは

お互いにどうだった？

マルキ

かなり良かったよ。

カルロス

僕のこと

それではきつと話題になった？

マルキ

君のこと？

もちろんさ。でも一般的なことだよ。

「彼は記念の品をとりだし、皇子に渡す。」

ここに大急ぎで、

王妃様から二言だよ。そして明日、時間と場所がわかるかと——

カルロス 「気が散った様子で読み、帳面をしまい、行こうとする。」

修道院長のところで、

では会うことにしよう。

マルキ

待てよ。何を急いでいるんだ。

誰も来やしないじゃないか。

カルロス 「作り笑いを浮かべて」

僕たち本当に

役割を交換したのかな？ 君は今日

えらく自信に満ちているね。

マルキ

今日？ なんで今日なんだ？

カルロス それで王妃様が僕になんと書いてよこしたと？

マルキ

ついさつき

読まなかったのか？

カルロス

僕が？

ああ、そうだ。

マルキ

どうしたんだ？ 何があつたんだ？

カルロス 「書かれたものをもう一回読む。うっとりとして、激しく」

天国の

天使様たちよ！ そうだ！ 僕はそうしたい———そうしたい———

君にとって価値ある存在でいたい———偉大な魂の持ち主たちを愛はより大きくするのだ。それが何であれ、そうなつてしまえ。

もし、君がそれを差し出すのなら、僕は従おう。———

あの方は、僕がとある重大な

決心のために心の準備をするように書いて下さっている。何を

あの方はお考えなのだろうか？ 君は知らないか？

マルキ

もしこれを、僕が

知っていたとして、カールよ———それを今聞くことに

同意できるかい？

カルロス

僕は君を馬鹿にしてしまったかな？

僕は気が散っていた。許してくれ、ローデリヒ。

マルキ

気が散っていた？ 何のせいで？

カルロス

何のせいって———自分でもわからないよ。

この記念の品は、では僕が持っていていいの？

マルキ

すっかりそうとはいかない。

むしろ僕は、君のを出してもらおうと思つて来たのだよ。

カルロス

僕のを？ 何のために？

マルキ

君が以前、

第三者の手に渡るべきではないちよつとしたことで、

手紙や取りやめにした構想なんかを持っていたら———

要するに君の手紙入れだよ———

カルロス

しかし何のために？

マルキ

どうなつてもいいようにだよ。

誰かが思ひかけず、立ちはだかつたりするかもしれないだろう？

僕のところなら誰も探しはしないよ。渡してくれ。

カルロス 「とても落ち着かず、」

でも変だよ！

どこから突然これが———

マルキ

落ち着いてくれ。

僕はこれで何かを暗示したつもりはないよ。

本当はないよ。これは用心なんだよ、

危険に備えてのね。だから何かを意図してはいないよ。

だから、君を怖がらせるようなことは本当にはないからね。

カルロス 「マルキに手紙入れを渡す。」

きちんと保管してくれ。

マルキ

そうするよ。

カルロス 「意味深長に彼を見つめて、」

ローデリヒ！

僕は君に多くを与えたね。

マルキ

まだそんなにたくさんではないよ。

僕が君からもらつたものに比べたら———あそこにあるのは

その残りというわけさ、元気でね———ごきげんよう。

「彼は行こうとする。」

カルロス 「内面で葛藤しているが——とうとう彼を呼び戻して、」

手紙をもう一度返してくれ。あの方からの手紙の内の一通もそこに入っている。あの方が

僕が命にかかわる病気で床に伏していたあの時、アンカラに送ってくれたものだ。いつも僕は

この手紙を心臓の傍に身につけていた。自分を

この手紙から引き離すのは、気が重いよ。

その手紙を僕に残してくれ——これだけ——他のはみんな持って行ってくれ。

「彼はその手紙を取り出し、手紙入れを返す。」

マルキ カール、僕は喜んでしているんじゃないよ。ただ

その手紙にかかわることだったんだ。

カルロス ごきげんよう！

「彼はゆっくり静かに立ち去るが、扉のところで一瞬立ち止まり、

再び向きを変えて、手紙を手渡す。」

これも持ってて。

「彼の手が震えている。涙があふれてきて、マルキに縋^{すが}り付き、顔を再び彼の胸にうずめる。」

父上がということはないね？

そうだろう、僕のローデリヒ？ これをあの人がしているなんてないよね？

「足早に立ち去る。」

第六場

マルキ 「皇子を驚いて目で追いながら、」

こんなことがありえただろうか？ こんなことが？

だとすると僕は彼を、よくわかっていなかったのでは？

すっかりは？ 彼の心のこの襞^{ひだ}は

本当に僕に向けられていたのだろうか？

友に対する不信！

それはない！ それは中傷だ！——弱虫である僕が

もつとおぼつかなく彼を訴えるなんて、

彼は僕に何をしてくれたのだろうか？

僕が彼を咎めているのは、僕自身がしようとしたこと——不信

——

そうかもしれない、そう思いたい。いつから、

彼はこの不思議な無愛想を

友人に向かつてしていたのだろうか？——それにしても苦しい！

君には出し惜しみはしないよ、カール、そしてもつと

君の善良な魂を苦しめなくてはならない。

王様は器を信じた、その器に王様は、

自分の神聖なる秘密を委ねたのだ、

そして信頼は感謝されることを求めている。多弁が

何だというのだろう、もし僕の沈黙^がが君を

苦しめないのなら？ ひよつとして避けられたか？

なぜ、眠っている人に、頭の上に広がる雨雲が姿を表したりするのだろうか？——十分だ、僕が雲を静かに、君の傍を通り抜けさせれば、そして君が起きたときに、晴れた空が広がれば。

王の執務室

第七場

王は椅子に腰かけている——彼の傍には王女クララ・オイゲーニア。

王 「じつと黙り込んでから、」

いいや！ それでも余の娘ではないか——どうして

自然はこれほどの真実をもつてして、欺くことができるのか？

この青い目は、余のものではないか！ あらゆる特徴に

余を見出すのではないか？

我が愛より生まれた子だ、そうだ、お前は。

胸に抱きしめよう——お前は我が血筋。

「たじろぎ、手を止める。」 我が血筋！

何を恐ろしいことに怯えているのだ？ 余の特徴はあいつの特徴でもないのか？

「王は小さな肖像画付きの首飾りを手に取り、絵と正面に立つ鏡を交互に見る——とうとう首飾りを床に投げ、素早く立ち上がり、王女を自分の前に引つ張る。」
消えろ！ 消えろ！
この奈落で、余は破滅するのだ。

第八場

レルマ伯爵。王。

レルマ 今ちょうど、

陛下、王妃様が控えの間にいらしております。

王 今？

レルマ そして謁見を

お願いしております——

王 しかし今？ 今か？

こんな尋常ではない時間に？——駄目だ！

今は話すことができない——今はだめだ——

レルマ こちらに

王妃陛下御自身がいらしております——

「退場。」

第九場

王。王妃が登場する。王女。王女は彼女のところに飛んでいき、
ぴったりとくっつく。王妃は王の前に跪き、王は黙って狼狽して
立っている。

王妃

我が夫よ、

あなたが王権の腕をふるって、私の

気が済むように、私に犯人を差し出すと

お約束になるまでは、

私の泥棒を隠している

宮廷から、私を引き離してくさだらなければ、立ちません。

王

しかし、立ちなさい――

ここでは――立ち上がるのです――

王妃

「立ち上がって」

泥棒が

いたずら者だということは、わかります――というのも、

貴重品入れには真珠やダイヤモンドが付いていて、

百万以上の価値があるからです。泥棒が

手紙の方で満足しているなら――

王

手紙を余はしかし――

王妃 まさにその通りですわ、我が夫君。手紙と

皇子様の肖像付き首飾りでした。

王 誰の――

王妃 皇子様、あなたの息子のです。

王 あなたに贈られた？

王妃 私に贈られたものです。

王 私に贈られたのか？

王妃 あなたは余に言うのか？

王 どうしてあなたには駄目なのですか、我が夫君？

王 そんな顔をして？

王妃

何がおかしいのですか？

私は、あなたもあの手紙を覚えていらつしやうと思っていました、

両王家の取り決めでもって、

ドン・カルロス様がサン・ジェルマンの私宛にお書きになったも

のです。

あの方が手紙に添えられた絵も

この遠慮ない行為に巻き込まれたかどうか、

その人の早急な希望が、自分勝手にも

このように大胆に踏み込むことを許したかどうか――それを自分

で決めてしまうことは遠慮いたします。

もしそれが、無遠慮だとしたら、それは

許せるものです――それは私がその泥棒のために保証人になりま

しょう。

というのも、その時泥棒は思いつかなかったのです、それが

母のためだったろうということに――

〔王の動きを見つめる。〕

それは何ですか？

何をお持ちなの？

王女 「この子は、そうこうするうちに、床の上にメダルを見つけて、それで遊んでいたのが、それを王妃に持っていく」

ねえ！ ご覧になって、お母様！

おきれいな絵——

王妃 何が、一体、我が——

「彼女はメダルを認識し、絶句して立ちすくむ。二人は予期しなかったという目で、お互いに見つめる。しばらくずっと黙り込んでから、」

本当なんですか、

陛下？

妻の心を試す、こんなやり方は、

とても王にふさわしく、高貴に思えますわ——でも
もう一つ質問させてくださいませ。

王 その質問は、余に対してだな。

王妃

私の猜疑心によって

身の潔白のことで悩むことはなくなりました。——
もし、ではこの盗みがあなたの命令

だったとしたなら——

王

そうだ。

王妃

そうしたら、私は誰も訴える必要はありません、
誰のことも残念に思うことはありません——誰のことも
あなた以外には。あなたにとって、妻とは
こんな方法がふさわしいのですね。

王 この言葉に聞き覚えがあるぞ。——そうだよ、奥様、

二度目もがっかりさせないでくれ、

お前がアランフェスで余をがっかりさせたように。

天使のように清い王妃は、その時

たいそう威厳を込めて言い訳を述べたが——今は

お前のことがもっとわかってるぞ。

王妃

何なのです？

王

要するにだ、

言わせてもらおう、奥様！——本当なのか、

なあ、あなたが誰ともあそこで口を利かなかったというのは？

誰とも？ それは本当に真実なのか？

王妃

皇子様と

お話しました。その通りです。

王

その通りだと？——では、

はつきりしたな。明るみになったぞ。なんと生意気な！

余の名誉を少しもいたわろうとしない！

王妃

名誉ですって、陛下？

もし名誉が傷つけられたのならば、

私がカステイリヤで婚礼二日目の朝にお贈りしたものの以上のも

のが

危険にされられていたのではないかしら。

王

なぜあなたは、これを余に対して認めなかったのか？

王妃

なぜなら私は、

陛下、慣れていなかったからです、

宮廷の家臣たちがいるところで、犯罪者に対するように取り調べされることなどに。真実を

私は否定するつもりはありません、もし敬意と

善良さをこめて要求されたとするならば。——そしてそれは

陛下が私にアランフェスで話を聞こうとしたとき、

そんな調子だったでしょうか？

大公たちが招集されて、

審判の席に着き、彼らの前で王妃たちが、

自分たちの静かな振る舞いに対して

釈明を求められるようではありませんでしたか？ 私は、

皇子様が是非にと求めた面会を

許可しました。私はそうしたので、我が夫君、

なぜなら、私がそうしたかったからです——なぜなら私は、慣習

を

手続きを省かずに判断の基準にしたかったからです、

その手続きを私は非の打ち所がないと思っています——あなたに

は

秘密にしていました、なぜなら私は

陛下と、私の宮廷の家臣たちの前で、

この自由について諍い^{いさか}をする気がなかったからです。

王
あなたはとてもまずけずけ物を言いますね、奥様、とても——

王妃
もっと言わせていただくなら、皇子様は、あの方にふさわしい
公正さを、お父上の胸の中では

享受することができないからです——

王
あいつにふさわしい公正さ？

王妃
ですからそういうわけで、私はこれを

隠さなければならぬのですよ、陛下？——私は皇子様を

とても大事に思っていますし、大好きです、

私のとても大事な身内の者として。その方は

かつては私にもっと関わりのあつた名前で呼ばれることに

ふさわしいと思われていました——私は

まだきちんとわかっていませんでした、そのためにあの方が私

に

よそよそしくしていなければならないのだということに、

他の誰よりも。なぜならばあの方はかつて

他の誰よりも私には大切だったからです。

もしあなたの国の基準が、良かれとして

縄で縛ってしまうなら、この基準で

それを解くのは、いくらか難しかったでしょうね、

私は、自分が憎むべき人物を憎みたくはありません——なぜなら

結局話をせざるを得なくなるからです——

そんなことは嫌です——私は、自分の選択が

拘束されるのを、もう見たくはありません。——

王
見たのは、私が弱っているところだったのだ。
エリザベート！ あなたが

これを出すことで
あなたは図々しくなっている。あなたは、

絶大な力を信じている、余の頑固さを

試すのにぴったりだ。——しかし

それだけ一層怖がっている。余を弱らせてしまえるものは、

また狂気に陥らせることもできる。

王妃 私は何を一体しでかしたのでしょうか？

王 「彼女の手を取り」

もし、

しい、いたとして——すでにやっていないなどあるかな？——もし

あなたの負債に対して、満額でたっぷり積み上げるには

あとほんの一息の重さだけだとしたら——

もし余が欺かれていた者だとしたら——

「王は彼女の手を放す。」

余は

この究極の弱さを乗り越えて勝利できるのだ。

余はそれができるし、そうしたいのだ——そうになると、余も、あな

なたも

痛ましいことだ、エリザベート！

王妃 私は何を一体しでかしたのでしょうか？

王 そうなると、余のために血が流れねばならない——

そんなところまで

王妃 事態は進展しているのね——神様！

王 余は

もう自分で自分がわからない——自然の摂理や声を敬うこともないし、諸国民の条約もう敬わない——

王妃

陛下のことを思うと

とても悲しく存じます——

王 「取り乱して」 悲しく思う！

仇の同情とは——

王女 「びっくりして母に飛びつく」

王様がお怒りになって、

私の大好きなお母様が泣いている。

王 「子どもを雑に王妃から突き飛ばす」

王妃 「やさしさと威厳を込めて、しかし震える声で」

この子を

私は虐待から守らなければなりません。

私と一緒にいらつしやい、娘よ。

「彼女は娘を抱き上げる。」

もし王様が

あなたのことをもう知らないというのなら、私は

ピレネー山脈の向こうに、保証人を呼ばなければなりませんね、その人たちが、私たちの面倒を見てくれるわ。

「彼女は行こうとする。」

王 「身を乗り出して、」

王妃？

王妃 これ以上は無理です。——もう沢山です——

「彼女は扉へ行こうとする。そして子どももともに敷居のところで崩れ落ちる。」

王 「彼女の方へ急ぎ駆け付け、すっきり動揺して」

神よ！ 何なのだ？——

王女 「おびえて叫びながら」

ああ、お母様が血を流している！

「王女は駆けだす」

王 「不安そうに彼女の介抱をしながら」

なんとおぞましい偶然だ！ 血とは！ 余はあなたに
それほど厳しく罰せられるほどのことをしたのか？ お立ちなさ
い、

しつかりなさい！ 立つのだ！ 誰か来い！

駆けつけてくるのだ——お立ちなさい——我が宮廷全体が

この芝居を面白がるというのか？

お願いだから、立ってくれないか？

「彼女は王に支えられて身を起こす。」

第十場

「先ほどと同じ人物たち。アルバ、ドミンゴがびつくりしながら登
場する。侍女たちが続く。」

王

王妃を

部屋に連れて行くのだ。具合を悪くしている。

「王妃退場、侍女たちに伴われる。」

アルバとドミンゴが近寄ってくる。」

アルバ 涙にむせばれた王妃様、そのお顔には
血が——

王 これは悪魔がなした奇跡だ、

余に付きまとうていたのだ。

アルバ、ドミンゴ

私たちだと？

王

そいつらは余に、

余を狂気に陥れてやると、しつこく言っていた。

確信できるようなことは、何も言わなかった。

アルバ

私たちは

持っていたものをお与えただけです——

王

そんなものは地獄の業だ。

余は、悔いることをしてしまった。これは

罪の意識の言葉だったのだろうか？

マルキ・フォン・ポーザ 「まだ舞台に姿を現さずに」

陛下とお話できるかな？

第十一場

「マルキ・フォン・ポーザ。先ほどと同じ人物たち。」

王 「この声にいきいきと立ち上がり、マルキに向かって数歩歩み

寄りながら」 ああ！ 彼が来た！

歓迎だ、マルキ——あなたと公爵には
もう用がない。下がちなさい。

「アルバとドミングは黙っていぶかしげにお互いの顔を見つめあい、退場。」

第十二場

「王とマルキ・フォン・ポーズ。」

マルキ

陛下！

二十の戦で、あなたのために死に立ち向かっていった老人には離れている自分が、とてもつらく思えるでしょう！

王

そんな風に考えたり

余に振舞ったりするとは、お前らしいな。

お前がこれまでわずかな間に余にしたことを、

あいつはあの歳になつてもしていない。

余は好意をこっそりと示したりはしない。

余の王としての寵愛のしるしは

お前の顔の上に、はつきりと広く輝かなくてはならない。

余は、余が友に選んだ男が

嫉妬されるのを見たいのだ。

マルキ

それではもし、暗闇の覆いだけが

その男に、その名に値する者でいられるようにするとしたらいかがでしょうか？

王

何の報告を

携えてきたのだ？

マルキ 私が控えの間を通り過ぎている時に、

ひどい噂を聞きました、

とても本当とは思えないのです——激しい

言い争い——流血——王妃様——

王 お前はそこから来たのだな？

マルキ

ただ驚くばかりです、

もし噂が間違っていないとしたら、もし

陛下がこの間、

何かをしでかされたのだとしたら——私が見つけたことは、事態の状況をすっかり変えてしまいます。

王

ほう？

マルキ

私はたまたま

皇子様の手紙入れから、

手紙を何枚か拝借する機会にめぐまれました。

それらが、私が願ったように、幾何の灯りとなれば——

「彼はカルロスの手紙入れを王に渡す。」

王 「興味津々にそれらを覗き見て、」

皇帝が

余の父君に宛てた書類——なんと？ これについては

聞いたことがないと記憶してるが？

「彼はそれに目を通し、脇へ置き、次の手紙に急いで移る。」

要塞の計画——タキトウスの

思想からのばらばらな書き抜き——これは

一体なんだ？——この筆跡には見覚えがあるぞ！
女性のものだな。

「彼は注意深く読む、大きな声になったり、小さな声になったりする。」

「この鍵は——

東屋の後ろの小部屋、

王妃の」——は！ 何が続くのか？——「そこでは

愛は自由に——聞き入れられ——素晴らしい報いをうけます」

悪魔のごとき背信行為だ！ 今わかったぞ、

あの女だ。これはあの女の筆跡だ。

マルキ

この筆跡は

王妃様のものですか？ あり得ません——

王

エポリ公女の

筆跡だ——

マルキ

そうかもしれません、つい先ほど私に

エナレスという小姓が、手紙と鍵を

持って行つたと打ち明けました。

王 「マルキの手を握り、激しい身振りで、」

マルキ！

余は自分が、恐ろしい手に捉えられているのがわかった！

この女は——実はという——マルキよ、

この女は王妃の貴重品入れをこじ開けたのだ、

最初の警告はこの女から発せられたものだった——誰が

どれだけ坊主がこれを知っているとわかるのか——余は

極悪非道な行いによって欺かれたのだ。

マルキ

そうだとすれば、まだ運がいいです——

王

マルキ！ マルキよ！

余は妻に、

やりすぎたのではないかと怖くなってきた——

マルキ

もし、

皇子様と王妃様の間に、秘密の

合意があつたとしたならば、それは

きつとかけ離れたものです——ほかの人が、

二人を責めたりできるのとは別のもです。私は

皇子様が、フランドルへ発ちたいと

お望みという確かな情報を得ています。

頭の中から王妃様を締め出すためです。

王

余もずっとそう思っていた。

マルキ 王妃様には名譽欲がおります——もつと申しても

よろしいでしょうか？——感受性豊かに、あの方は

王位への参与から締め出され、

ご自分の誇り高い希望が潰えたと思われています。

皇子様の若さの慌ただしさが

あの方の彼方まで見通した計画に提案したのです。

——あの方のお心を——

私はあの方が愛せるのかどうか、疑わしく思っております。

王

あいつの

国家戦略に長けた計画に、余はおびえたりはしない。

マルキ あの方が愛を受け入れるかどうか？——皇子様から何も悪いことを恐れていないか？ この問いは

私には検討に値するように思われます。ここで思いますに、より厳しい監視が必要かと——

王 お前は余のために、あいつを捕まえるのだ。——

マルキ 「少し考え込んで」もし陛下が、

私にこの職務を遂行することができると思われるのであれば、お願いしなければなりません、どうか無制限にすっかり私の手におゆだねいただけますよう。

王 そうしよう。

マルキ すくなくとも、ほかの

助手は無しです、どんな名前と呼ばれようと、私があれこれと必要だと思う企てにおいては、私を邪魔しないように——

王 誰にもさせない。余はそれをお前に約束しよう。お前は

余の良き天使だ。どんなにか

こうした助力を負っていると感謝しているか！

「最後の言葉のところで部屋に入ってきたレルマに向かって」

お前がこちらへ来るとき

王妃はどうだった？

レルマ 倒れられたことで、なおも消耗されておりました。

「彼はマルキを疑わし気な視線でじろじろ見つめ、去る。」

マルキ 「しばらくの間の後、王に、」

なおも注意する必要があります。

皇子様には警告をせねばと存じます。

あの方には良いお友達がたくさんおります——おそらくヘント²では反乱勢力との結びつきがあるかもしれません。恐怖心のせいで、あの人は疑わしい決心をしでかしかねません——ですので、是非すぐさま

今回、素早い方法がとれるように、

予防措置を講じさせてください。

王 お前の言うとおりだ。しかしどうやって——

マルキ 秘密の

逮捕命令書を、陛下が

私の手にゆだねていただければと、私が

危機の瞬間にすぐさま

この方にお仕えできるように——そして——

「王は考え込んでいるように見える。」

これは

国家機密でなくてはなりません、しばらく——

王 「書き物机に向かい、逮捕命令書を書きながら、」

国土は

危険にさらされている——並みならぬ手段も

² ベルギーの都市。中世には織物産業で栄えた。フェリペ二世の父カール五世生誕の地でもあるが、一五三九年に反乱が起り、カール五世は町から自治や種々の特権をなく奪し、皇帝・スペイン王代官による支配を始めた。

差し迫った危険では許容される——さあ、マルキよ——
ためらわずに受け取るがよい。

マルキ 「逮捕命令書を受け取る」

これはきわめてまれなことです、王様。

王 「手を彼の肩にのせて」

行きなさい、

行くのだ、マルキ——我が心を落ち着かせ、

また夜に眠れるようにしてくれ。

「二人とも別々の方向に退場」

回廊

第十三場

カルロスが非常に不安そうにやって来る。レルマ伯爵が反対側から
やってきて出会う。

カルロス ちょうどあなたを探していたところです。

レルマ 私もお探していたところです。

カルロス 本当なのか、

後生だから、本当なのですか？

レルマ 何ですか？

カルロス あいつがあの方を剣で刺したことは？ 部屋から
血を流したあの方が運びだされたことは？

あらゆる聖人様たちにかけて！ 答えてくれ。

レルマ 王妃様は

失神され、お倒れになるときに引っ掛けられたのです。

そのほかは何でもありません。

カルロス そのほか危険はないのだな？

そのほかは？ あなたの名誉にかけて、伯爵？

レルマ 王妃様には

危険はございません——しかしその分、あなた様に危険かと。

カルロス お母様には危険がないのだな！ さてやれやれだ！

王様がお子様とお母様に狂いかかり、

秘密がばれたのかと。

レルマ 最後の方は、

当たっているかもしれません——

カルロス 当たっているかと！ どうして？

レルマ 皇子様、あなたに今日警告いたしました、

あなたはそれを見くびられました。二回目は

もっと有効に利用してください。

カルロス どういうことか？

レルマ もし私が思い違いを

しておりませんでしたら、皇子様、数日前

私は青空色のビロードでできた書類入れを目にしました。

金糸が織り込まれているものが、あなたのお手元に――

カルロス 「いくらか動揺して」 そんなのを

持つているよ。そうだ――それで？――

レルマ 蓋のところに

シルエットがついていて、真珠で囲まれている――

カルロス 全くその通り。

レルマ さっき不意に

王様のお部屋に参上したところ、

そんな感じのものが王様のお手元に見えたように思います。

そしてマルキ・ポーザが、あの方のそばに立っていました――

カルロス 「わずかに硬直して黙り込んだのち、激しく」

それは

本当ではないぞ。

レルマ 「神経質に」

では私は、詐欺師ということになります。

カルロス 「彼をじっと見つめて」

あなたはその通りだ。そうだ。

レルマ ああ！ 私をお許しください。

カルロス 「恐ろしい身振りで رفتり来たりして、とうとう彼の

前に立ち止まる」

彼がお前にどんな悪さをしたのだ？ 何を

穢れを知らない結びつきが、お前にしでかしたのだ、

それをお前は地獄のような熱心さで

引きちぎろうと必死だったのだな？

レルマ 皇子様、私は

あなたが不当にも加えられるこの苦しみをありがたく存じます。

カルロス ああ、神よ！

神よ！――神よ！ 猜疑心から守りたまえ！

レルマ 王様自身のお言葉も

覚えております、

どんなに感謝しているか、と私が入った時におっしゃられました、

この新しく知ったことが、あなたには悪いことになりました！

カルロス ああ、黙れ！ 黙れ！

レルマ アルバ公爵が

外れたようです――ルイ・ゴメス公子からは立派な封印がはく奪

され、

マルキに渡されたようです――

カルロス 「深く物思いに沈み、」彼は僕には黙っている！

なぜ僕に黙っているのだ？

レルマ 宮廷中が

彼をすでに全権の大臣として、

限らない愛顧を受ける者として驚嘆して見つめています――

カルロス 彼は

僕を大切にくれた、とても大切に。僕は彼には大事だった、

彼自身の命くらい。ああ、それはわかっているんだ――

このことは幾千回も試されて証明された。

でも何百万の人々が彼にとって、祖国が

彼にとって、たった一人よりも大切でないわけがあるかな？

彼の胸はたった一人の友達には大きすぎたのだ。

彼は僕を自分の徳のために犠牲にしたのだ。僕は

彼をだからといって責められるだろうか？——そうさ！ たしかに！

もうはつきりした。もう僕は彼を失ったのだ。

「彼は端に行き、顔を覆う。」

レルマ 「しばらく沈黙してから、」

素晴らしい皇子様、何か私にできることはありませんか？

カルロス 「彼の方を見ないで、」

王様のところに行つて、僕のことと裏切つてくれ。

僕からしてあげられることはないから。

レルマ 何がこの後起こるか、

お待ちになるおつもりですか？

カルロス 「手すりにもたれ、前をじつと見ながら」

僕は彼を

失ったんだ。ああ、もう僕はすっかり見捨てられたんだ！

レルマ 「皇子に、同情にあふれて近寄りながら、」

ご自分が助かる方法を考えたくはないですか？

カルロス 自分が助かるつて？——優しいね！

レルマ そうすれば、

そうすればあなたは、どなたに対してもおびえることはないのでは？

カルロス 「激昂して、」

神様！ あなたはなんてことを僕に警告するんだ！——お母様！

僕が彼に再び渡した手紙！ 彼には

委ねるつもりはなかったのに、そうしてしまった！

「彼は激しく、手をもみ合わせながら行ったり来たりする」

どうやって

どうしてあの方が、一体彼の役に立ったのだろうか？ あの方を、もっと大切にすべきだったのに。レルマ、

彼はそうしなかっただろうね？

「急に、決然と」

あの方のところに行かなくては——あの方に警告しなくては、心構えをしておかなくては——レルマ、親愛なるレルマ——

誰を一体使者にたてよう？ もう誰もいないのではないか？

ありがたい！ もう一人友達がいた——そして

これ以上悪くなることはないな。

「素早く退場」

レルマ 「彼を追い、呼びかける、」 皇子様、どちらへ？

「退場」

第十四場

王妃。アルバ。ドミンゴ。

アルバ もしお許しただけなのでしたら、王妃様――

王妃 何のご用件かしら？

ドミンゴ

陛下に

差し迫った危険のため

ご立派な方が我々に

こうした折にみすみす黙っていることをお許しになりません。

これはあなた様の安全を脅かしております。

アルバ

我々は急いで、

時宜にかなった警告によって、あなた様に対して企てられた

陰謀を無しにしたいのです。

王妃 「彼らを訝しく見つめながら、」

尊敬すべきお方、そしてあなた、高貴なる公爵よ、

あなた方は私を本当に驚かせますね。そのような

忠誠心を、私はドミンゴ様や

アルバ公爵からは本当に予期しておりませんでした。

あなた方をどんなにか尊重しなければならないか、わかっていま

す――

あなたは、私を脅かす陰謀とおっしゃいましたね。

聞いていいかしら、誰なの――

アルバ お願いです、

マルキ・ポーザのような者から、お身をお守りください。

彼は国王陛下の秘密の任務を

遂行しています。

王妃 聞いてうれしく思いますわ、

王様がそんなに素晴らしい選択をなさったことを。

マルキのことを、みんなが、よい人間だと、

立派な男だと、ずつと褒めておりましたもの。こんなにも

王様の好意がふさわしく分け与えられたことはありませんでした

――

ドミンゴ ふさわしく分け与えられたですと？ 我々は、

もつとよく存じております。

アルバ これはもうとつくに秘密ではありません、なんのために

この人物が用いられているかということは。

王妃 どういうことですか？

一体どうだというのですか？ あなたは

私の期待をずいぶん高めてくれますね。

ドミンゴ ――陛下がご自分の貴重品入れを

最後にご確認になってから

ずいぶん経ちますでしょうか？

王妃 どういうことかしら？

ドミンゴ そして、

高価なものは何もなくなっていなかったでしょうか？

王妃 どうして？ どういうこと？ 私が失くしたのは、

宮廷中が知っているでしょう——でもマルキ・ポーザが？
どうしてここにマルキ・ポーザが関係するの？

アルバ とても関係しています、陛下——というのも

皇子様も、大切な書類を失くされており、

それが王様のお手元に、今朝

渡ったのです——あの騎士が

秘密の謁見に来た時に。

王妃 「しばらく考えてから、」

奇妙だわ、

神様にかけて！ それにとでもおかしいわ！——私は

これまで夢にも思わなかった敵を見つけたようだよ、

そしてまた、これ以上よいと思ったこともない

二人のお友達も——本当に。

「彼女は二人を探るような目でじっと見つめながら、」

正直に申し上げるなら、私はもう危険だったのです、

私のご主人様のところで、私になされた

最悪の仕事を——あなた方に許していたので。

アルバ 私たちに？

王妃 あなたたちによ。

ドミンゴ

アルバ公爵！ 私たちとは！

王妃 「ずっと目を彼らに向けたまま、」

だから私には、

私があわてていたことが気づいてもらえて

とてもありがたいわ——どっちにしても

陛下に今日のうちにお願ひするつもりでした、
私の告発者を

教えてくださいと言うと決めていました。ますます都合がいいわ

ね！

私はアルバ公爵を証人に立てられます。

アルバ 私をですか？ 真面目におっしゃっておられるのですか？

王妃 なぜいけないの？

ドミンゴ 私たちがあなたにお隠ししている

すべての職務を無力化するために——

王妃 「誇りと威厳を込めて」 隠していますって？

知りたいものですわ、アルバ公爵、

王様の妻が、あなたや、

あなた、祭司様、と、申し合わせたことを

その夫が知ってはいけないなんて——私は

無罪ですの、有罪ですの？

ドミンゴ

アルバ しかし、もし王様がそんなには公正でいらっしやらないならば？

王妃 今はずいなくともそうでないとしたら？

だとしたら、

王様がそうしてくださるまで、待たなくてはなりませんね——

あの方がそうだった時に、

勝つ者に幸いあれ！

「彼女は彼らにお辞儀をして退場。彼らは反対側に下がる。」

エボリ公女の部屋

第十五場

エボリ公女。すぐに続いてカルロス。

エボリ それでは、もう宮廷中に広まっている

異常な知らせは本当なのですね。

カール 「登場する」

驚かないでください、

公女さん！ 子供のようにおとなしくしていますから。

エボリ 皇子様——こんなに驚かせて。

カール

あなたはまだ

傷ついていますか？ まだ？

エボリ

皇子様！

カール 「しつこく」

まだ傷ついていますか？

お願いです、教えてください。

エボリ

何だというのです？

お忘れになっているようですね、皇子様——私に

何をお望みなのですか？

カルロス 「彼女の手を激しく握りながら」

ねえ、君は永久に憎んだりできる？

傷つけられた愛は決して許されないかな？

エボリ 「離れようとしながら」

何を

思い出させますの、皇子様？

カルロス

君のいいところと、

僕の恩知らずをだよ——ああ！ よくわかつているさ！

とてもひどく、僕は君を傷つけてしまったよね、

君の優しい心を引き裂いて、

天使のまなざしから、涙を流させた——ああ！

それを悔いて、今ここにいるのではないけれど。

エボリ 皇子様、放してください——私は——

カルロス

僕が来たのは

君が優しい乙女だからだよ、

君の優しくて美しい魂に期待しているからさ。

ねえ、ほら、ねえ、もう僕には友達がいらないんだ、

この世界に、もう君しかないんだ。かつては

僕によくしてくれたじゃないか——永久に憎むことはないはずだ

よ。

許さないということもないだろう。

エボリ 「顔を背けて」

ああ、黙って！

もう沢山です、後生ですから、皇子様——

カルロス

君に、

あの黄金時代を思い出してもらいたいんだ——

君の愛を思い出してもらいたいんだ、

君の愛だよ、ねえ、その愛は

僕には似つかわしくなく通り過ぎてしまった。

今確認させてほしいんだ、僕が君にとつてどうだったかって、

君の心の夢が、僕に何をくれたかって――

もう一度――たった一度でいいから、僕を

あの時みたいに、君の心のまえに立たせて、

その影に捧げてもらいたいんだ、君が僕に

僕に永遠にこれ以上捧げられないというものを。

エボリ

ああ、カール様！

なんと残酷に、私をからかうことでしょう！

カルロス

女性である以上に

強くなってくれ。侮辱のことは忘れて、

女性ではできないことをしてくれ――君の後には

どんな女性もできないようなことを。いくらか果てしのないこと

を

僕は君に要求している――させてくれ――跪いて

君に誓うよ、――お願いだから、二言僕に

お母様と話をさせてくれ。

「彼は彼女の前で屈みこむ。」

第十六場

先ほどと同じ登場人物たち。マルキ・フォン・ポーズが突入してきて、そのあとに王の護衛士官二人が続く。

マルキ 「息を切らして、取り乱しながら割って入り」

彼は何を

話したのだ？ この男の言うことを信じてはいけない。

カルロス 「まだ跪いている、上ずった声で」

神聖なるものの

すべてにかけて――

マルキ 「彼を激しく遮って」

彼は狂っている。狂っている男の

ことなど聞いてはいけない。

カルロス 「もつと大きな声で、切羽^{せっぱ}つまって」生死が

かかっているんだ。僕をあの人のところへ連れて行ってくれ。

マルキ 「公女を力づくで彼から引き離して」

彼の言うことを聞いたら、

あなたを殺します。

「士官の一人に」

コードウア伯爵、

王の名において。

「彼は逮捕状を示す。」

皇子はあなたの囚人だ。

「カルロスは、雷に打たれたように立ちすくんでいる。公女は驚いて叫び声をあげて逃げようとする。士官たちが驚く。長く深い沈黙。マルキが激しく震えており、必死で落ち着こうとしてしているのが見て取れる。」

皇子に向かって、

剣を

引き渡してください——エボリ公女、

あなたはそのまま、そして

「先ほどの士官に」あなたは、

陛下が誰にも話すなと命じたことを守ってください——誰にもです——

あなた自身にもです、ご自分の首にかけて！

「彼はなおもひそひそと士官と言葉を交わし、続いてもう一人の士官に向かって。」

私は

すぐに陛下の足元にはせ参じ、

ご報告申し上げる——

「カルロスに」

そしてあなたにも——

私をお待ちください、皇子様——一時間後に。

「カルロスは意識が遠のいたまま連れていかれる——ただ通り過ぎるときに、感情のこもらない死んだような視線をマルキに投げかけるが、マルキは自分の顔を覆う。公女はもう一度逃げようと試みる。マルキは彼女を腕をつかんで連れ戻す。」

第十七場

エボリ公女。マルキ・フォン・ポーズ。

エボリ どうかお願いですから、ここから

行かせてください——

マルキ 「彼女を前に連れて行き、恐ろしいほどの真面目さで」

彼はお前に何と言ったのだ、

運の悪い人よ？

エボリ 何にも——行かせてください——何にも言っていないせ

ん——

マルキ 「彼女を力づくで連れ戻す。より真剣に、」

どれだけのことをお前は聞き知ったのだ？ もう

逃げ道はないぞ。お前はこの世で

もう誰にも話すことがないだろう。

エボリ 「彼の顔を驚いて見つめ、」

偉大な神様！

どういうおつもりでいらっしゃるの？ 私を

殺したいのではないですか？

マルキ 「剣を見せて」

その通り、じっくり

考えてみたよ。さっさとやろう。

エボリ

私を？ 私を？

一生のお願いですから！ 私が何を
したというの？

マルキ 「天を仰ぎ、剣を彼女の胸に突き立て、」

まだ時間はある。まだ毒が

唇まではまわっていない。私が盃を

打ち砕こう。そうすればすべては

元あったままになる——スペインの悲運と

ある女の命は！——

「彼はここにきて、懷疑的に落ち着く。」

エボリ 「彼にもたれかかり、その顔をじっと見つめる、」

さあ、何をためらっているの？

遠慮はご無用よ——結構よ！ 私は

死ぬにふさわしいわ、望むところよ。

マルキ 「腕を徐々に下す。少し熟考の後、」

これは

野蠻というより、臆病だったかもしれない——違う！ 違う！

神に称えあれ！——まだほかの方法があるぞ！

「彼は剣を落とし、急いで出ていく。公女は反対側の扉から駆け出す。」

王妃の居室

第十八場

「王妃がフエンテス伯爵夫人に向かつて。」

宮廷で、何の集まりがあるのでしょいか。あらゆる音が、

伯爵夫人よ、私には今日は怖く思えます。

ああ、ちよっと見えてきて、どういふことか

教えてちょうだい。

「フエンテス伯爵夫人退場、そしてエボリ公女が駆け込んでくる。」

第十九場

王妃。エボリ公女

エボリ 「息が上がっている、顔は青ざめて引きつり、王妃の前に崩

れ落ちる」

王妃様！ お助けを！

彼が捕まりました。

王妃

誰が？

エボリ

あのマルキ・ポーザが

王様の命令で彼を捕まえたんです。

王妃 でも誰を？ 誰のこと？

エボリ 皇子様をです。

王妃 走ってきたの？

エボリ つい先ほど、彼らが捕まえていました。

王妃 それで、誰が

あの方を捕まえたんですって？

エボリ マルキ・ポーザです。

王妃 ほら！

神に称えあれ、あの方を捕まえたのが

マルキ・ポーザで！

エボリ このことをあなたは

そんなにも穏やかにおっしゃるのですね、王妃様？——ああ神様！

予感してらっしゃらないのね——ご存じないのね——

王妃 どうしてあの方が

逮捕されてしまったのか？——それは間違いを

しでかしたからでしょう。若者の

激しい性質にはとても自然なことだわ。

エボリ 違います！ 違います！

私はもつとよく存じます。——いいえ——ああ、王妃様！

極悪非道の、悪魔のような行いです！——あの方に對してもう救いはありません！ あの方は死ぬのです。

王妃 死んでしまうとは！

エボリ そして彼を殺したのは私です。

王妃 死んでしまうとは！

おかしな人ね、よく考えてみたの？

エボリ どうしてかというと——

なぜ彼が死ぬのか！——ああ、そこまで来てしまうと、わかっていたなら！

王妃 「やさしく彼女の手を取り」

公女さん、

あなたはまだ取り乱しています。まず心を落ち着けて

一息ついて、私の心をすっかり試すような

そんなにもぞつとするような想像をしてお話ししないようにね。

何をご存じなの？ 何が起きたの？

エボリ ああ！

そんなお優しく腰を低くなさらないで、

そんなによくなさらないで、王妃様！ 地獄の焰のように

それは私の良心を炙りたてます。

私は、汚れた目で、

あなたの栄光を仰ぎ見る資格はありません。

後悔と恥と自己嫌悪で

あなたの足元にうずくまる

哀れな女を、踏みつぶしてください。

王妃 かわいいそんな人！

何を打ち明けようというの？

エボリ 光の天使様！

偉大なる聖人様たち！ それでも

それでもあなたは悪魔をお感じにならないのですね、
あなたはこんなにも慈愛に満ちて微笑みかけられる――

今日悪魔を知ることになります。私です――私は
あなたのものを盗んだ泥棒です。

王妃

あなたが？

エボリ

そしてそれらの手紙を

王様に渡しました。

王妃

あなたがた？

エボリ

あなたを訴えるという

ひどいことをしたのは私です。

王妃

あなたは

あなたはだつて――

エボリ

復讐――愛――狂気――

私はあなたを憎みました、そして皇子様を愛していました――

王妃 あなたがあの人を好きだったから？

エボリ

私があの人に告白したのに

愛してもらえなかったからです。

王妃 「沈黙した後、」

ああ、今

すべての謎が解けました！――お立ちなさい。

あなたはあの方が好きだったのね――私はもう許しますよ。
忘れますよ――お立ちなさい。

「彼女に手を差し出す」

エボリ

いいえ！ いいえ！

恐ろしい告白をまだしておりません。
その前はだめです、偉大なる王妃様――

王妃 「注意深く」

まだ何を

聞かなければならないの？ お話しなさい――

エボリ

王様――

誘惑――ああ、あなたは目を背ける――あなたのお顔に
非難を読み取ります――私があなたに責め立てた

同じ罪を

私自身が犯しました。

「彼女は真つ赤な顔を床に押し付ける。王妃は退場する。長い間。
オリヴァレス公爵夫人が、王妃が入っていった部屋から出てきて、
公女がまだ先ほどと同じ場所にいるのを見る。公爵夫人は黙つて
公女に近づく。音がして、公女は目を上げ、半狂乱で立ち上がる。
というのも、もう王妃の姿が見えないからである。」

第二十場

エボリ公女。オリヴァレス公爵夫人。

エボリ

神様！ あの方は私を見捨てたのね！

今すべてが終わったわ。

オリヴァレス 「近寄ってくる、」

エボリ 公女さん――

エボリ あなたがなぜいらしたのか、わかっています、公爵夫人。

王妃様があなたを送ってよこしたのですね、私に判決を伝えるために――早く！

オリヴァレス 陛下からの御命令で、

あなたの十字架と

鍵を受け取ってこいとのことです――

エボリ 「侍女の証である黄金色の十字架を胸から取り出し、公爵夫人に手渡す。」

でも一度だけ、

王妃様の手に口づけすることはできませんか？

オリヴァレス 聖母修道院に向かわれるようですが、

あなたには門を閉じたまにすることです。

エボリ 「激しく涙を流しながら」

王妃様には

もうお会いできないのですね？

オリヴァレス 「彼女を、顔を背けながら抱きしめて、」

どうかお幸せに！

「彼女は素早く退場する。公女は部屋の扉まで追いかけるが、すぐに公爵夫人に閉められてしまう。数分間、黙って、身動きせずにその前で跪いている。それからさっと立ち上がり、顔を覆い隠しながら急いで退場する。」

第二十一場

王妃。マルキ・フォン・ポーザ。

王妃

ああ、やっとマルキだわ！ あなたが来てくれてよかった！

マルキ 「青ざめ、ひどい表情をして、声は震えており、登場している間ずっと厳かで深遠な動きをしている。」

陛下お一人ですか？ 誰も

隣の部屋で私たちを盗み聴きしていませんか？

王妃 誰もいませんわ――なぜですか？ 何をもつて来てくれたの？

「彼女は彼をまじまじと見て、驚いて引き下がる。」

なんとまあ、

変わってしまったの？ これは何なのですか？ あなたは

私を震えさせるわ、マルキ――あなたのお顔が

まるで死にそうな人のように引きつっているわ――

マルキ

おそらくもう

ご存知のことかと――

王妃

カルロス様が逮捕されたことね、

しかもあなたがと、聞きました――では

本当なんですか？ あなたの他には

信頼するつもりはありません。

マルキ

これは本当です。

王妃

しかもあなたが。

マルキ 私です。

王妃 「彼を一瞬、疑い深げに見つめて、」

あなたの行為は尊重します、

理解することができなくても——でも今回は

不安になる女の気持ちを許してほしいのだけれど。

あなたは**ずいぶん**大胆な賭けに出てものね。

マルキ

その賭けに

私は負けました。

王妃 天の神様！

マルキ

どうか

落ち着いてください、王妃様。あの方のためには
すでに配慮済みです。私が負けたのです。

王妃 何を耳にすることになるのかしら！ 神様！

マルキ

というのも、

誰が、実現が疑わしい計画で、

私にすべてを任せると命じるでしょうか？ すべてを？

こんなに奇抜で、こんなに自信満々に天と戯れるなんて？

偶然という重い舵を支配し、

それなのに全能の神であろうとしないという

僭越せんごくなことをあえてする人間は

誰だのでしょうか？

ああ、これが妥当なのです！——しかしどうして一体今、

私なのでしょうか？ この一瞬は貴重です、あたかも

とある人間の命のように！ それに誰に

審判者の慎ましやかな手から、

最後の恵みが私に垂れないかどうか、わかるのでしょうか？

王妃

審判者の

手からって？——なんという厳かな調子！

このお話がなにを言わんとしているのか、理解できないわ。

でもとても怖いわ——

マルキ

あの方は救われました！

いくらかかろうとも、あの方には同じことです。でも

ただ今日限りです。まだ少し

時間があります。あの方はこの時間を大切にしなければなりません。

ん。

今晚のうちに、あの方はマドリードを去ります。

王妃

今晚のうちに？

マルキ 準備は整っています。この

カルトジア会修道院は、これまで

私たちが友情の隠れ家としていましたが、ここで

郵便馬車が彼を待ち受けています。ここで

この世のしあわせが、私に与えられたものと入れ替わるのです。

足りないものを、あなたが添えてくれます。たしかに

私のカール様には多くのことを胸に抱いているのですが、

まだたくさんあります、それをあの方はご存じのはずです。

しかし私には、すべて

個人的にあの方とのかを処理するためには、
ちよつと時間が足りないようです——あなたは
今晚あの方とお話になります、だから私は
あなたに宛てて——

王妃 落ち着かせてください、マルキよ、
もつとはつきり説明してください——そんな恐ろしい
謎解きをやめて話してください——
何が起きたのですか？

マルキ 私はまだ

大切なことを片付けていません。

あなたの手にそれを委ねます。短い間でしたが、
幸せでした。

私は王様の息子を愛しました——私の心は
ただ一人に捧げられ、

全世界を抱いたのです！——私のカルロス様の心の中に
私は数百万人のための天国を作り上げました。

ああ、私の夢は美しかったです——しかし
天のご意思は、私の美しい植物が実る前に
私をお呼びのようです。

まもなく彼のローデリヒはもういなくなります、
友人が姿を消し、恋人になります。ここで、
ここで——ここで——この神聖な祭壇で

王妃様の御心に、
私の最後の大切な贈り物を委ねます、

ここであの方は見つかることでしよう、私がもういなくても——
「彼は顔を背ける、涙で声が詰まる。」

王妃 これは

遺言だわ。私はまだ

あなたの血がめぐっているとと思うのだけれど——それとも
この話に意味があるの？

マルキ 「落ち着こうとする、そして厳かな調子で続ける、」

皇子様にお伝えください、

私たちが、聖餐式のパンを分けて

あの熱狂的な日々に誓ったことを思い出してくださいます。

私は自分の分はしました。私は

誓いに忠実に死んでいきます——今は

彼の番です、彼の仕事を——

王妃 死ぬのですか？

マルキ 彼がすべきことは——

ああ、彼に伝えてください！理想像を実現するのです、

新しい国家の、大胆な理想像を、

友情が神のように生まれるのです。あの方は

最初の手をこの礎石にかけるのです。

あの方が成し遂げるか、負けてしまうか——

あの方には同じことです！彼は手をかけるのです。もし

数世紀が流れて、

自分が王座にいる様子や、彼の、あるいはその後再び

新たに現れるお気に入りの者が、同じ

熱意をもって取り組んでいることを予想することで、
王の息子は鼓舞されることでしょう。あの方に伝えてください、
もし男でいたいならば、青春の夢を大事にするようにと。

感動的な、より良い理性を死なせてしまう虫に、

優しい神々のごとき花の心を開いてはならないのです——あの方
が

ごみのような知識に驚嘆したり、

天国の娘を誹謗したりする間違いを犯さないように、伝えてくだ
さい。

彼には前にも言ったのですが——

王妃

どうということなの、マルキ？

何のためにこんな——

マルキ

そして彼に伝えてください、

私が人類の幸福を彼の魂に託したと、

私がそれを死にゆくときに彼に要求したと——要求です！

そして十分にその根拠があるのだと。そうすれば

私には、この国の上に、新しい時代が続いているようなことにな
ります。

王様は、私に彼の心を寄せてくださった。彼は私を

我が息子と呼んだのです——私は彼の印章を身につけています、

そして彼のアルバはもういないのです。

「彼は物思いにふけり、数秒黙って王妃を見つめる。」お泣きです
ね——

ああ、この涙なら知っています、あなたは心の美しい人です、

喜びのために流されているのです。しかし過ぎたことです、
過ぎてしまったのです。カール様か私か。選択は

あつという間で恐怖でした。一人が負けです。

私はこの一人でありたいのです——これ以上は

お知りにならないでいただきたいです。

王妃

ようやく

ようやくあなたが言っていることが分かってきました——

運の悪い方ね、何をなさったのですか？

マルキ 明るい夏の日を生かそうとして、

晩の時間が二時間弱経ってしまいました。

私は王様を断念します。私が王様にも

何ができると？——この硬直した地面に

もうバラは花開きません——ヨーロッパの

運命は、わたしの偉大な友人の中で成熟するのです！

彼に、私はスペインを譲ります——これまでは

フィリップの手の中で血を流してきましたが！

——それにしても痛々しい！

私にも、あの方にも悲しいものです、もし私が悪い方を選んだと
後悔するようなことになれば！——それはない！それはな
い！

私は私のカルロス様をよく存じています——そんなことにな
るはずがありません——そして私の証人は、王妃様、

あなたです！

「しばらく沈黙。」

私は、このバラが、この愛が、芽吹くのを見ました。
情熱のうちでもっとも不幸なものか

彼の心に根を張るのを見たのです——そのころは
私もバラを手に入れようとすればできたのです。

私はそうしませんでした。私はこの愛の方に近づいたのです。

この愛は私にとって惨めではありませんでした。世界は

別の方向に進展できます。私は後悔していません。

私の心は、私を咎めてはいません。私は生きることを見ましたが、
そこでは愛はまさに死だったのです——

この希望を失った炎の中に、私は早々に希望の黄金の光を認めた
のです。

私はあの方を優れたものへ導きたかったのです。

最高の美へと、あの方を高めたかったのです。

死すべき定めによって、私にはこの予想図が拒まりました、

言葉——言葉であの方に

この予想図を示しました——私ができたことは、

あの方にあの方の愛を説明したことだけです。

王妃

マルキよ、

あなたのお友達が、あなたの任務をすっかり果たすでしょう、

もしあなたが私のことを、彼のことと除外してくれたならですが、

私があらゆる女性の義務から引き離されていると、

本気で考えたのです、

私を彼の天使にしたりして、

あの方の武器に、操を与えてしまえだなんて？

そんなことは、あなたはきつとお考えでなかったはず、
私たちの心がどれだけのことをしてかしてしまうかを、
もし私たちがそういう呼び名で情熱を美化するのならね。

マルキ すべての女性には、ただ一つのことでは除外です。

その一つのことには、私は全幅の信頼を寄せています——それとも
あなたは英雄的な行為の創造者であることを

熱望する者たちのせいで、わが身を高貴に恥じるべきでしょう
か？

フィリップ王に何の関わりがあるのでしょうか、

エスクリアルで彼を美化することが、

その美しい姿の前に立った画家を燃え立たせるとしても？

弦の響きに潜んでいる甘い響きは、

聞こえない耳で聞こうとする買い手に

ふさわしいでしょうか？ この買い手は

残骸の中でそれを打ち壊す権利を買収したのです、

しかし銀の音色を呼び起こし、

歌の喜びに溶け合わせる技までは買っていません。

真実は賢者に対して存在するのであり、

美は、それを感じる心に対してあるものです。この二つは

お互いに深くかかわっています。この信念を

卑怯な先入観がめっちゃめっちゃにはいけません。

約束してください、永遠に彼を愛すると、

人間への恐怖や、誤った英雄気取りや、

無意味な戸惑いには決してそそのかされることなく、

変わることなく、永遠に彼を愛すると。

それを私に約束してくれますか？——王妃様——
私の手にかけて、約束してくれますか？

王妃 私的心を

あなたにお約束しましょう、ただ一人、永遠に
私の愛の審判者です。

マルキ 「手を引き下げて」

——仕事を成し遂げました。
これで私は安心して死ねます

「彼は王妃にお辞儀をして行こうとする。」

王妃 「彼を目で追いながら、」

行ってしまうのね、マルキ——私たちは

——近いうちに——また会えると——そう言わずに？

マルキ 「もう一度戻ってきて、顔を背けながら」

きつと！

またお会いしましょう。

王妃 あなたの言ったことはわかりました、ポーズ——

とてもよくわかりました——なぜあなたは

私にこうしたのです？

マルキ あの方か私なのです。

王妃 嫌です！ 嫌です！

あなたは、あなたが崇高と考えることに

突進してしまっただけですね。否定しないでちょうだい。

あなたのことはよく知っています。あなたはずっと

それを渴望していました——幾千もの心が碎けてしまえばいいの
です、

あなたの誇りがそうしたいのなら、何を患うことがあります。

ああ今——今私はあなたのことが分かりました！ あなたは

ただ賛美されたいだけなのね。

マルキ 「当惑して、独り言で」 いいえ、そんなつもりは

毛頭ありませんでした——

王妃 「しばらく沈黙してから、」

マルキよ！

救いの道はないのですか？

マルキ ありません。

王妃 ないのですか？

よくお考えになって。何とかありませんか。

私も何かできませんか？

マルキ あなたでも無理です。

王妃 あなたは私のことを

半面しかご存じないわ——勇気があるのよ。

マルキ それは存じております。

王妃 でも救えないの？

マルキ ないです。

王妃 「彼の元を離れ、顔を覆い、」

行きなさい！

もう男の人を大事にしたりなんかするもんですか。

マルキ 「激しい身振りで、彼女の前に身を投げ、」

王妃様！

——ああ神よ！ 生きるとは、それでも美しいものです。

「彼は飛び上がり、素早く退場。王妃は部屋に入る。」

王の控えの間

第二十二場

アルバ公爵とドミンゴが、黙り込んだまま別々に行ったり来たりしている。レルマ伯爵が王の執務室から出てくると、続いて郵便長官のドン・ライモンド・フォン・タクシス。

レルマ あのマルキは、まだ姿を見せていないのですか？

アルバ まだですね。

「レルマは再び中へ入ろうとする。」

タクシス 「登場しながら」 レルマ伯爵、取り次いでください。

レルマ 王様は誰ともお会いになりません。

タクシス お伝えください、

お話ししなくてはならないと——陛下には

とてもかわりの深いことです。急いでください。

ぐずぐずしている暇はないのです。

「レルマは執務室に入る。」

アルバ 「郵便長官に歩み寄る。」

残念ながら、タクシス殿、

耐えることに慣れねばなりません。王様とは

お話しできないでしょう——

タクシス

できない？ なぜなのでしょう？

アルバ

ポーザ騎士に

お許しを得ようとするなんて、注意した方がいいですよ、彼は父と息子を捕えてしまいましたからね——

タクシス フォン・ポーザですって？ どうして？ その通りだ！

まさにこの人の手から、私はこの手紙を受け取ったのです——

アルバ 手紙？ 何の手紙を？

タクシス ブリュッセルに送るように

頼まりました——

アルバ 「注意深く」 ブリュッセル？

タクシス これをちょうど

王様にお持ちしたのです。

アルバ ブリュッセルですと！ お聞きになりましたか、

司祭様？ ブリュッセル宛てですよ！

ドミンゴ 「手紙に歩み寄り、」 これはとても

疑わしい。

タクシス なんと不安げに、なんと迷いながら、

この手紙は私に委ねられたことか！

ドミンゴ 不安げ？ そうですか！

アルバ 宛名は一体だれですか？

タクシス

ナッサウ・オラニエン

公子宛³です。

アルバ

ヴィルヘルム宛ですか？

司祭様！ これは謀反です。

ドミンゴ

それ以外に

あり得るでしょうか？——ええ、たしかに、この手紙を
すぐさま王様にお届けしなければなりません。

たいしたお方ですね、なんとという手柄を、

あなたの王様への奉仕で厳格に立てられたことでしょう！

タクシス 敬愛すべきお方、私は自分の義務を行っただけです。

アルバ あなたはよくないさいました。

レルマ 「執務室から出てくる。郵便長官に向かつて、」

王様はあなたとお話しします。

「タクシスは中に入っていく。」

あのマルキはまだいないのですね？

ドミンゴ

みんな

あちこちで彼を探しています。

アルバ

奇妙だし、珍しいですね。

皇子様は、国家に捕らえられて、王様は

なぜそうだか、ご自分でもまだご存じないのですね？

³ オラニエンについては、注1を参照のこと。彼はナッサウ家の出身であったため、ここでそのようの呼ばれている。

ドミンゴ

彼は

まだ自分で、報告をしに来ていないのですね？

アルバ 王様は一体どうやってこれをご納得したのだろうか？

レルマ

王様は

まだお黙りになったままです。

「執務室で音がする。」

アルバ

何だっただんだ？ 静かに！

タクシス 「執務室から出てきて、」

レルマ伯爵！

「二人は部屋に入っていく。」

アルバ 「ドミンゴに向かい、」

ここで何が起こりつつあるのでしょうか？

ドミンゴ

この横取りした手紙のせいであんなざつとするような音がしたのでしょうか？——私には

何もいいことが想像できません、公爵。

アルバ

あの方はレルマ様をお呼びになっている！

ということとは、あなたと私が

控えの間にいるとご存じのはず——

ドミンゴ

私たちの時代は過ぎました。

アルバ

私はもう、かつてはここで、すべての扉がさっと開かれた

あの人物ではないのでしょうか？——ここではどんなにか、

私の周りのすべてが変わったことか——なんとよそよそしい——

ドミンゴ 「執務室の扉にそつと近寄り、その前に聞き耳をたてて

立ち止まり、」

聞いて！

アルバ 「しばらくの後、」

すべてが

死の静けさです。自分の息が聞こえる。

ドミンゴ 二重の壁掛けが、反響を吸収してしまう。

アルバ 離れて！ 誰か来る。

ドミンゴ 「扉から離れて、」 私はとても身が引き締まり、

とても不安です、あたかもこの瞬間に

大きな運命が決まってしまったかのようです。

第二十三場

バルマ公子、フェリア公爵、メディナ・シドニア公爵、そのほかの重臣たちが入場する。先ほどと同じ登場人物たち。

バルマ

王様と

お話しできますか？

アルバ

いいえ。

バルマ

だめと？ 誰が王様のところにいるのですか？

フェリア

きつと

マルキ・ポーザですか？

アルバ

みんなちょうど彼を

待っているところです。

バルマ

まさに今

私たちはサラゴサから着きました。

驚愕がマドリード中にひろがっています——これは一体本当なのですか？

ドミンゴ はい、残念ながら！

フェリア 本当なのですね！ あの方は

マルタ騎士によつて逮捕されたのですね。

アルバ そうです。

バルマ なぜです？ 何が起きたのですか？

アルバ これは誰にもわからないのです、陛下と

マルキ・ポーザ以外には。

バルマ

王国議会の

招集も無しにですか？

フェリア

この国家冒険に関わった者に

災いあれ！

アルバ その人物に災いあれ！ 私もそう叫びましょう。

メディナ・シドニア

私もです。

その他の重臣たち

私たちみんなもです。

アルバ 私に続いて執務室に来るのは誰ですか？——陛下の

足元に身を投げてお願いしましょう。

レルマ 「執務室から飛び出してきて」

アルバ公爵！

ドミンゴ

やっと！

神に称えあれ！

「アルバは急いで中に入っていく。」

レルマ 「息を切らして、大きな身振りで、」

もしあのマルタ騎士殿が来たら、

陛下は今お一人ではない、あの方は

騎士をお呼びです——

ドミンゴ 「レルマに向かって、他の者たちは、期待に満ちた好奇心をもって、彼の周りに集まって来つつある。」

伯爵、何が起きたのですか？

あなたは死人のように蒼ざめていらつしやる。

レルマ 「急いで去ろうとする。」

悪魔のようです！

パルマとフェリア

一体何です？ 一体何です？

メディナ・シドニア

何をなさっているのですか？

ドミンゴ 「同時に、」

悪魔的？ 一体何のことです？

レルマ

王様は

お泣きになりました。

ドミンゴ お泣きに？

全員 「同時に、不意の驚きをもって、」

王様がお泣きになったのですと？

「執務室の鐘の音が聞こえる。レルマ伯爵が急いで入っていく。」
ドミンゴ 「彼に向かって、引き留めようとして、」

伯爵、もう一言——すいませんが——行ってしまった！

私たちは驚きに暮れて、立ち尽くすだけです。

第二十四場

エボリ公女。フェリア。メディナ・シドニア。パルマ。ドミンゴと
先ほどと同じ登場人物たち。

エボリ 「急いで、取り乱しながら、」

王様はどちら？ どちら？ 王様にお話ししなければなりません。

「フェリアに向かい、」

ねえ公爵、私を王様のところに案内してください。

フェリア

王様は

大切なご用件です。どなたも

通すことはできません。

エボリ

王様は

もう恐ろしい判決に署名してしまったのですか？ 王様は

騙されています。王様に騙されていると

お示しします。

ドミンゴ 「彼女に遠くから、意味ありげなしぐさを送り、」

エボリ公女様！

エボリ 「彼のところに向かいつつ、」

あなたもここにいらしたのね、司祭様？ そうだわ！ ちょうどあなたが必要でした。私に力を貸してください。

「彼女は彼の手を握り、執務室に連れて行こうとする。」

ドミンゴ

私ですか？ — あなたは、

あなたは正気ですか、公女様？

フエリア

下がってください。

王様は、今あなたのご用件は伺いません。

エボリ

聞いていただかなくては

ならないのよ。真実をお聞きにならなくてはなりません——真実を！

たとえ王様がどれほど神様のようだとしても！

ドミンゴ

下がって！ 下がって！

あなたは図々しい。下がってください。

エボリ もう、あなたの偽の神様に怯えてなさい。

私はまったく図々しくなんてないです。

アルバ公爵

「目を輝かせて、勝ち誇って歩いている。彼はドミン

ゴのところに急いで向かい、彼を抱擁する。」

すべての教会で

テ・デウムを奏でさせてください。

勝利は我々のものです。

ドミンゴ

我々の？

アルバ 「ドミンゴと、その他すべての重臣に向かい、」

さあ、みなさま、

お入りください。続きを私からお話いたします。